

巻頭言

副院長

樋口 晶文



かざぐるまが発行されて12号、早くも2年半が経ちました。かざぐるまは大きな音をたてて元気に回っています。多くの連携医療機関の皆様にも認知されてきたでしょうか？



従来、病院の広報機能が、極めて弱かった市立札幌病院にとって、地域連携センターの創設は、画期的なこととあらためて思います。連携医療機関の皆様にとってもこの広報誌かざぐるまが日々の診療に少しでもお役に立つことがございましたら、嬉しい限りです。我々は自治体病院の職員であり、市民の皆様にも多くのサービスを提供し市民1人1人が幸せになるように奉仕するのが仕事です。そのため我々は、医療を通じできる限りの努力をすべしでありましょう。



現在の医療は、患者さん第一は勿論ですが、病院経営もとても重要です。現在の、医療プランは少子高齢化・財源の少なくなった時代を迎え、なるべくお金をかけないで良質の医療を提供することを目標に、厚労省の考えたやり方で進んでいます。しかし現状は決してうまく行っているとはいえません。

現代の医療現場は、紹介入院が多く、単価が高く、外来で検査をする治療、そして入院期間が短い治療が良い治療（経営効果が高い）といわれています。有名な大きな病院とベンチマークで比較すると市立札幌病院はまだままで、いつも専門家から問題点を指摘されます。良い病院は、患者さんに短期間で良いサービスを行いそして患者さんから効率よくコストを頂くところかもしれません。

2011年度の経営状況を見るに、全体の医療状況は前年度より改善しており、特に、大病院、大学病院の伸びは顕著です。決して、診療報酬改定のせいだけではなく、全国各病院の必死の経営努力が窺えます。当院も大勢に遅れないように病院の効率化、近代化を目指すべきでしょう。今回の診療報酬改定をふまえて新たな対応を早急に実施しなければなりません。

しかし、経営第一主義のなか、医療の安全、安心を忘れてはなりません。患者さんの顔を忘れない医療を常に心がけるべきでありましょう。



この様な状況で、地域連携センターの役割は益々重要になっていくでしょう。スタッフそれぞれが、市立札幌病院を一線で支えているという自覚とプライドで是非頑張りたいです。勿論、病院全体で大いなるサポートは、決して忘れてはならず必要な要件であります。

当院へ患者さんをご紹介いただく多くの先生方から「さすが市立札幌病院」といわれるように努力してまいります。

今後とも何卒よろしく願いいたします。

